



城

第五十八回

このだい
国府台城

～里見 vs 北条の攻防～

深草 祐一

千葉県市川市にある^{このだい}国府台城跡をご存じでしょうか。現在の江戸川にあたる川の河岸段丘上に築かれたこの城は、江戸湾を中心とした水運を押さえる上で重要な拠点であり、関東に勢力を拡大する小田原の北条氏と、関東旧勢力と結んだ房総の里見氏が、2度の大战を繰り広げた城として有名です。今回は、北条五代実記の記述に沿って、この2度の合戦の経緯を紹介したいと思います。

第一次^{このだい}国府台合戦

室町時代、関東では、東国統治のために鎌倉府が設置され、足利尊氏の次男を初代とする鎌倉公方の足利氏と、それを補佐する関東管領^{かんれい}の上杉氏が権威を持っていました。しかし、鎌倉公方^{くぼう}は、京の室町幕府及び関東管領上杉氏と対立し、争乱の末、下総古河^{こが}へ移り(古河公方)、そして、関東管領上杉氏は山内上杉氏と扇谷上杉氏^{おうぎがやつ}の両家が争うようになり……と、一言では説明できない複雑な争いが繰り広げられていました。やがて、伊豆の韮山城から身を立てた北条早雲^{そううん}が小田原城を奪い、相模、武蔵へと勢力を拡大する中で、旧来の権威である上杉氏と対立していきます。そして、二代目北条氏綱^{うじつな}は、扇谷上杉家臣の太田資高^{すけだか}(謀反の疑いをかけられ殺害された太田道灌^{どうかん}の息子)の寝返りを受けて江戸城を攻略し、扇谷上杉氏当主を川越城へと追ったのでした。

そうした頃、上総国(房総半島北部)では、国司の真里谷武田氏^{まりやつ}が小弓城^{おゆみ}の原氏と争い、たびたび敗れていました。そこで、先の古河公方足利政氏^{こがくぼう}の次男で、親兄弟と不和になって奥州に下っていた足利義明^{よしあきら}を呼び寄せて大將軍に据え、軍勢を徴集しました。この義明という人は、不敵な性格で腕力が強く、太刀の達人としても知られた英雄だったことから、上総、下総、安房の国人が多く馳せ参じ、3年のうちに原氏を追い落として小弓城に入り、下総まで平定しました。そして小弓城は小弓の御所と呼ばれるようになります。近国の武士達は

次々に義明^{よしあきら}に付き随い、安房^{あわ}の里見氏^{よしあきら}までも義明に従いました。義明は、「八カ国を平定し、古河^{こが}の公方^{くぼう}を配流して、鎌倉に御所を置いて関東の公方^{くぼう}になる計画だ」などとのほめかし、周囲の者も迎合したため、古河公方側の人々は穏やかではありませんでした。北条氏綱^{うじつな}は、古河公方の息子に娘を嫁がせ、古河公方の後見を務めていたので、悔しく思いつつも、扇谷上杉氏^{おうぎがやつ}との抗争の最中であつたため、義明には時折使者を送って機嫌を取っていました。しかし、10年以上かかってついに川越城を落し扇谷上杉氏^{おうぎがやつ}の勢力を北方へ後退させたところで、古河公方から北条氏綱^{うじつな}へ、足利義明追討の命が下りました。北条氏綱が領国の軍勢を集めて小弓御所へ進撃を開始したとの知らせを聞いた義明は、前進して防戦すべく、弟と息子を先陣大將に、里見義堯^{よしあきら}を副將軍に据え、安房・上総・下総の軍勢をかき集めて国府台^{このだい}に進軍し、市川を前にして陣を敷きました。北条氏綱^{うじつな}は、江戸城で総勢2万の軍勢を集結させ、軍議の末、早急に国府台城^{このだい}を攻め落とすことに決めます。そして、先陣は夜のうちに江戸川のへりに忍び寄り、夜が明けるとともに川端に進出しました。小弓方^{おゆみ}の偵察隊は2～3万にも見える北条勢を見て、味方の兵力では正面からは戦えない旨報告しますが、義明は、「戦いは軍勢の大小には影響しない。ただ兵が剛胆か臆病かによるのだ。」と言い放ち、攻撃を命じたのでした。しかし、一斉に川を渡ってくる北条勢を迎え撃った先陣大將は、激しい戦いの末に討ち取られます。その知らせに激怒した義明は自ら馬に乗って出撃しました。敵の大將とみた北条勢が討ち取ろうとしますが、乗馬が巧みで太刀の達人である義明は、北条勢を追い回し、切って落とし、戦いを挑んだ北条方の武將の首をあっという間に切り落として見せます。その刀裁きに北条勢は遠巻きにして近づくことができませんでした。そこで、強弓引きとして有名な武士が密かに義明^{よしあきら}に接近し、やおら名乗りを上げると「受けてみよ!」と矢を放ちました。三人張りの強弓から放たれた矢は鎧の千段の板を突き通し、義明はあっけな

く討ち取られたのでした。総大将を失った小弓勢は、散り散りになって退却し、小弓の御所を焼いて安房へと落ち延びていきました。

第二次国府台合戦

それから3年後、北条氏綱は病で亡くなり、子の氏康が跡を継ぎます。そして3年後、関東管領上杉氏が旧勢力を糾合した8万もの軍勢で川越城を取り戻そうとします。しかし、北条氏康は10分の1の8千の軍勢で夜襲を敢行し、上杉連合軍を散々に打ち破りました。それ以後、上杉氏は急速に衰亡し、ついに越後へ逃れて長尾景虎に上杉の名跡を譲ることになります。

その川越夜戦からおおよそ20年後、以前、扇谷上杉氏を裏切って北条氏綱を江戸城に引き入れた太田資高の息子康資らの兄弟は、かつて江戸城攻略の際に城主に据えられず、富永氏、遠山氏とともに江戸城に配置されるに止まったことを不満に思い、北条に敵対していた岩槻城の太田資正と密かに相談し、安房の里見氏と協力して、江戸城を手に入れようと画策しました。そして、太田資正の呼びかけに応じた里見義弘は安房・上総の軍勢を集めて国府台城へ進出します。しかし、ここで謀議が北条方に漏れ、太田康資らは江戸城を脱出しました。一方、北条氏康は、息子氏政とともに出陣し、江戸城の富永、遠山勢を先鋒として国府台城へ進撃させました。江戸川を挟んで両軍が対峙した時、里見勢が引き揚げるとの情報が入ってきます。江戸城の同僚から裏切り者が出たことに責任を感じて焦りがあったのか、先陣の富永、遠山は、これを好機とみて川を渡り、攻撃を掛けました。しかし、里見勢は、台の中段に布陣して待ち構えていたのです。わめきながら坂を上る北条勢を意図した難所へ引き込むと、正木大膳の一手が一気に突撃。富永、遠山をはじめ、多くの武将を討ち取りました。そして、江戸城から脱出した太田康資らの兄弟も全線にわたって攻撃をかけたため、北条勢の先鋒武将140騎ほどが討ち取られたのでした。

まだ戦場に到着していなかった北条氏康は、この報告に激怒して、時を置かずに攻撃を掛けることを決意しました。ここで、地黄八幡の異名をとり戦上手で知られる北条綱成が、「敵は今朝の戦いで富永、遠山を討ち、油断しているでしょう。自分の手勢が回り込んで思わぬ方向から攻撃を仕掛けるので、同時に本隊が川を渡って攻め掛ければ、敵は敗北すると考えます。」と進言します。果たして偵察をさせると、里見勢はほとんどの者が

台の上に上り、酒を飲んでいて、すぐに戦える状態ではないことが分かりました。そこで、北条氏政と綱成が手勢を率いて出撃し、城の北東方面の攻めにくい所は避けて、南に12kmほど迂回して川を渡り、台を上って敵の背後へ出ました。折しも夕闇が迫って霧が立ちこめ、小雨も降っていたことから、里見側は北条の別働隊に全く気付きませんでした。そして、北条別働隊は背後から突然攻め掛かり、本隊に向かって合図を送りました。それに合わせて本隊が一斉に川を渡り、北条氏康自身が切り込んで多数の敵を討ち取りました。まさか今夕のうちに敵が攻めてくるとは思ってもみなかった里見勢は、前後から敵に挟まれて大混乱に陥り、多くの武将が討ち死にしました。大将の里見義弘は自ら刀を取って戦いながら落ち延びたものの、馬を射られ、家臣の馬を譲られて命からがら落ち延びていきました。そして、大将の馬が射倒されているのを見た家臣達は、大将が討ち死にされたと思ったのか、次々に戦場に戻り、雑兵を合わせると5千余人が討たれたといえます。事の発端の太田兄弟も散々に攻め立てられて敗走したのでした。

現在の国府台城

総武線市川駅または京成線国府台駅から江戸川沿いに北へ、もしくは北総線矢切駅から南へ1kmほど歩いたところにある里見公園が国府台城の跡です。公園の西側は、江戸川沿いに高さ10m以上の断崖になっており、河岸段丘の地形を利用して築かれた城であることがよく分かります。さらに、北条別働隊が難所のため避けたという北側に回ると、その昔、入り江が入り込んでいたという地形がよく残っていて、入り江の底だったと思われる平地には、現在2列ほどの住宅が立ち並んでいます。段丘が高いだけに、木々の間からは遠く東京スカイツリーを望むこともできます。上記各鉄道沿線にお住まいの方は、一度足を運んでみてはいかがでしょうか。



台上から見下ろす江戸川と東京スカイツリー